



ラオス
カンボジア



遠藤久美子さん メコンの国際協力の現場へ in ラオス&カンボジア

全長4,800キロに及ぶ大河の恵みを受け、著しい発展を遂げるメコン地域。
長年にわたり日本が協力を行ってきたこの地を、
「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバーの遠藤久美子さんが訪問。
ラオスとカンボジアの国際協力の現場を視察した。

サーティットンカム小学校の子どもたち。「子どもたちの成長が見えるので、日々やりがいを感じています」という宮本隊員の言葉に、遠藤さんは感銘を受けていた



日本の円借款で建設されたナムグム・ダム。「将来はダムを支えるリーダーになりたい」と、力強く話してくれたスタッフの笑顔が印象的でした」と遠藤さん

ラオスで見た日本人の軌跡

の前に広がる大きなダム湖。ラオスの首都ビエンチャンから車で約2時間、メコン川の支流に建設されたナムグム・ダムに着くと、そこには、都市のけん願とはかけ離れたおだやかな空間があった。
「このダムのために、どれだけの人がどんな思いを込めて、時間を費やしてきたのでしょうか……」
そう話すのは、「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバーでもある、女優の遠藤久美子さん。数年前、テレビ番組の撮影でニジエールの青年海外協力隊員(看護師)の活動を視察した遠藤さんは、今度は日本の政府開発援助(ODA)のモニタリング事業の一環として、メコン地域に足を運んだ。

遠藤さんのラオス・カンボジア視察の詳細は、JICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/activities/evaluation/monitoring.html>)へ。

1970年代、日本を含む9カ国の支援で建設されたナムグム・ダム。ここで発電された電力の7〜8割がタイに輸出され、ラオスにとって貴重な外貨獲得の手段となっている。ダムの管理施設でテキパキと働く現地スタッフの姿に「このダムは、日本人の技術者から懸命に学び続けてきた、彼らの努力の結晶ですね」と遠藤さんは感心した様子だった。
さらに北上すること約40分、協力隊の宮本幸子さん(小学校教諭)が活動するサーティットンカム小学校へ。「ラオスの小学校では、教材が不足している上に体系的な教育システムが整っていないま

ん。最初はどのように指導したらいいのか悩みました」と話す宮本さん。教材を改良したり、授業の進め方を工夫したり、そんなふうにと現地の先生とともに試行錯誤を続けている。「日本のやり方を押し付けるのではなく、ラオスに合ったやり方を見つけよう」と努力をしている。子どもたちも生き生きと学んでいて、宮本さんの思いはみんなに届いていますね」と遠藤さんは感動していた。
ビエンチャン市内では、JICAの草の根技術協力事業を通じて認定NPO法人難民を助ける会が支援する車いす製造工場を視察。ここでは、事前に使用者か

らヒアリングをしてカルテを作成し、一人一人に合った「オーダーメイド」の車いすが作られている。遠藤さんは工場長の話を聞きながら「街のバリアフリー化なども見据えていて、将来が楽しみです」と話していた。
生命の水の源にある努力
さらに国境を越えて、隣国カンボジアへ。70年代後半のポル・ポト政権時代の混乱により、ハード・ソフトの両面において壊滅的な被害を受けた同国。JICAもあらゆる分野で復興支援を進めてきた。その一つが、人々の生命の源となる「水」に対する支援。JICAは首都プノンペンで90年代から水道施設の改修を行い、03年からは北九州水道局、横浜水道局の協力を得ながら、プノンペン水道公社の人材育成を展開してきた。
この日、遠藤さんは日本が改修を支援したプンプレック浄水場を訪れた。「市内では水道水が飲めるまでになりました」というプノンペン水道公社職員の説明を聞き、「日本の思いがきちんと形になっていきますね」と遠藤さん。運営から管理まで、現地スタッフだけで運営されている様子を見て、「日本の支援を卒業して、育成された人材が活躍しているのは素晴らしい。これが国

際協力なんです」と話した。
しかし市街地から離れると、まだまだ水道が通っていない地域も多い。コンボンチャム州カントゥー村では、日本の協力で井戸が4つ建設されていた。一つ一つの井戸を自分の子どものように気にかかけ、住民とともに維持管理に汗を流す大野孝之・JICA専門家に、遠藤さんは大変感銘を受けた様子。「ただ井戸を受け渡すだけでなく、「一緒にやろう!」と呼び掛けないと、住民もついてこないですね。大野専門家の井戸や村人への思いやりに感動しました」。



カントゥー村の人々に歓迎を受ける遠藤さん。「一つ一つの支援が積み重なりこの国の人たちの選択肢が増えていき、自立につながっていくのだと感じました」



(上)ラオス南部では大分県発の地場産業を推進する取り組みとして「一村一品プロジェクト」を実施中。遠藤さんもバナナの茎の繊維を使った織物に挑戦
(下)コンボンチャム州カントゥー村に建設された井戸。「安全な水が使えるようになり病気が減った」と村人たちは喜んでた

際協力なんです」と話した。
しかし市街地から離れると、まだまだ水道が通っていない地域も多い。コンボンチャム州カントゥー村では、日本の協力で井戸が4つ建設されていた。一つ一つの井戸を自分の子どものように気にかかけ、住民とともに維持管理に汗を流す大野孝之・JICA専門家に、遠藤さんは大変感銘を受けた様子。「ただ井戸を受け渡すだけでなく、「一緒にやろう!」と呼び掛けないと、住民もついてこないですね。大野専門家の井戸や村人への思いやりに感動しました」。

1週間の滞在で、2カ国10以上の現場に足を運んだ遠藤さん。今回の視察を通じて、「ラオス、カンボジアという国が、国際協力を通じて日本とつながっているんだ」と感じたという。「途上国で奮闘している日本人に出会って、こんなにも日々悩み葛藤して、何かを築き上げようとしているんだということは、現場に行かないと分からなかったことです」。
地球が丸いみたいに、世界中のすべての人が平等に潤ってほしい。遠藤さんのそんな思いが、これからの彼女の発信を通じて、一人でも多くの人に伝わっていくことを期待したい。